



羅針盤



竹之内 辰也
Tatsuya Takenouchi

新潟県立がんセンター新潟病院 副院長

皮弁にどんどんチャレンジしよう！ 「半自己流」のすすめ

「皮弁ができるようになりたいが、指導してくれる上級医がない」そう思って手術から遠のいている若手皮膚科医は多いのではないのでしょうか。学会の皮膚外科ハンズオンセミナーでは、よくそのような参加理由を耳にします。

しかし、多くの局所皮弁は体表解剖と皮弁作図の基本さえ知っていれば実践できます。私自身は、他の診療科や外部の施設での研修や指導を受けた経験はなく、病院図書室で形成外科や眼科の書架から手術関係の教科書や文献を漁り、それを頼りにいろいろな皮弁術式に挑戦してきました。執刀回数を重ねることで、自分なりの（思い込みも含めて）術式の型を作り上げてきました。言ってみれば「半自己流」です。もちろん多くの失敗も経験しましたが、それが次につながる貴重な学びとなります。こういった昭和的根性論は、医療コンプライアンスが重視される今の時代にはそぐわないかもしれませんが、その思いは今も変わりません。

ただし、「半自己流」を実践するためには優れた教材が必要です。昨今は、皮膚科医を対象とした皮膚外科関

連の書籍や文献が巷に溢れており、むしろその選択に悩むほどです。そのなかで、優れた教材とは何なのでしょう。まずは何といたっても、写真やわかりやすいシェーマが多く掲載されているものを選びましょう。さらには、術式に関連した臨床解剖、手術操作の具体的なコツ、やってはいけない注意事項、などが記されていればなおさらよいです。とはいえ、一般的に執筆者には自分をより大きく見せたいという自己顕示欲が働きがちで、とかく派手なチャンピオン症例を提示しがります。そんな見映えのよい術中写真ばかりが掲載された教材を見ても、ハードルが高いと感じて若手はむしろ引いていくかもしれません。そこで本特集では、各皮弁術式における基本デザインや手術操作の実際、初心者が陥りがちな過ちなど、皮弁の“dos and don'ts”についての解説を各Partの執筆者にお願いしました。読者の皆様にとってなじみやすく、いろはから学べる易（優）しい内容の1冊になっているはずです。本特集が、皮膚外科難民となっている皮膚科医に向けた、永久保存版の指導書となってくれることを願います。